

VI) 情報の提供、諸報告に関する事項

1. 情報の提供方法及び提供先

1) 郵送（*印は注意報のみ）

○国関係

*農林水産省 消費・安全局植物防疫課、*同中国四国農政局 消費安全部、同島根農政事務所（統計部、地域第一、二課）、気象庁松江地方気象台、同西郷測候所。

○独立行政法人

農業環境技術研究所、農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター、同果樹研究所、同果樹研究所ブドウ・カキ研究拠点、同野菜茶業研究所、同近畿中国四国農業研究センター。

○他県関係

*鳥取、*岡山、*広島、*山口、*徳島、*香川、*愛媛、*高知、各県担当課。

○県内関係

島根県立松江農林高等学校、同出雲農林高等学校、同邇摩高等学校、同矢上高等学校、同益田翔陽高等学校、同図書館、各病害虫防除員(果樹)。

○県内団体

島根県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会島根県本部、島根県農業共済組合連合会、農業振興協会、島根県農薬卸商協会。

○報道機関

朝日、山陰中央新報、サンケイ、島根日日、中国、毎日、読売 各新聞社出雲支局(出雲市役所記者室)、NHK松江放送局、同出雲通信部、山陰放送、同ラジオ業務部、山陰中央テレビ放送局、同出雲通信部、日本海テレビ。

2) F A X

○県内関係

島根県農林水産部 農業経営課、同農畜産振興課、東部、西部農林振興センター各農業普及部（松江、浜田、安来、中海干拓、雲南、出雲、県央、大田、益田）、隠岐支庁 農業普及部、同島前地域振興グループ、中山間地域研究センター、農業技術センター、農業大学校、各市町村、各病害虫防除員(水稲)。

○報道機関

日本農業新聞松江支局、同中国四国支所(臨時報除く)

3) メール

県内各農業共済組合

4) ホームページ

発生予察情報（発生予報、特殊報、注意報、臨時情報）

2. 発表状況

(1) 発生予察情報の発表状況

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報	10回	240部	<p>○イネ 葉いもち3回、穂いもち6回、紋枯病6回、白葉枯病4回、縞葉枯病2回、萎縮病1回、黄化萎縮病1回 ヒメトビウンカ3回、ニカメイチュウ5回、ツマグロヨコバ イ7回、イネドロオイムシ1回、イネミズゾウムシ2回、セ ジロウンカ3回、トビイロウンカ5回、コブノメイガ4回、 斑点米カメムシ類5回</p> <p>○ムギ うどんこ病2回、赤かび病2回、さび病類2回</p> <p>○ダイズ ハスモンヨトウ5回</p> <p>○ナシ 黒斑病8回、黒星病5回 シンクイムシ類6回、ハマキムシ類2回、ハダニ類8回、 アブラムシ類3回、カメムシ類2回</p> <p>○カキ 円星落葉病1回、炭そ病3回、うどんこ病7回 カキミガ3回、チャノキイロアザミウマ2回、カメムシ類 6回、カキクダアザミウマ1回</p>

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報			○果樹全般 カメムシ類 3回 ○キャベツ 黒腐病 4回、菌核病 4回 ○アブラナ科野菜 アブラムシ類 3回、コナガ 4回、アオムシ 4回、ハスモンヨトウ 4回、 ○タマネギ ボトリチス属菌による葉枯れ 1回、べと病 2回、腐敗病・軟腐病 2回、白色疫病 1回、 ○イチゴ 灰色かび病 2回、うどんこ病 4回、アブラムシ類 2回
特 殊 報	2 回		○トマトすすかび病 1回 ○イチジクヒトリモドキ 1回
注 意 報	1 回		○イネ斑点米カメムシ類 1回
臨時情報	2 回		○イネトビイロウンカ 1回 ○果樹カメムシ類 1回

3. 発表内容

1) 特殊情報

(1) 第1号 (平成18年12月 1日)

トマトすすかび病の本県での初発生が確認されたので特殊報を発表します。

【概況】

平成18年9月、奥出雲町、吉賀町の施設栽培の葉かび病抵抗性品種トマト、ミニトマトにおいて、葉に葉かび病に非常に似ている症状が認められました(図1、2)。そこで、島根県農業技術センター資源環境研究部病虫グループにおいて診断した結果、*Pseudocercospora fuligena*(Roldan) Deightonと同定し、トマトすすかび病と診断しました。

その後、県内の施設栽培トマト、ミニトマトを調査した結果、松江市、出雲市、雲南市、益田市、飯南町、美郷町及び邑南町でも確認され、県内の広範囲で発生していることがわかりました(表)。

本病は、宮崎県、徳島県、京都府、岐阜県、愛知県、茨城県、千葉県及び鳥取県で発生が確認されています。

- 1 病害虫名 トマトすすかび病
- 2 病原名 *Pseudocercospora fuligena*(Roldan) Deighton
- 3 作物名 トマト、ミニトマト
- 4 発生場所 県内全域
- 5 発生生態

1) 病徴

葉が侵される。初め葉の裏側に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生ずる。病斑はしだいに拡大して、病勢の進展と共に、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形病斑となり、灰褐色から黒褐色に変わる。葉の表面には、裏面よりやや遅れて、不明瞭な淡黄褐色の病斑を生ずるが、裏面に比べて少ない。

葉かび病に酷似しており、肉眼での判別は困難であるが、分生子を顕微鏡下で観察すれば、細長い形状から葉かび病とは容易に判別できる(図3、4)。

2) 伝染経路

被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。多湿条件で発病しやすく密植、過繁茂、換気不十分の施設栽培で発病しやすい。

6 防除対策

- 1) 多湿条件で発病しやすいため、密植、過繁茂を避け、施設内の換気を行う。
- 2) 発病葉、被害残渣は施設外に持ち出し、土中深く埋めるなど適切に処分する。

7 その他

疑わしい症状が発生している場合は、病虫害防除所（0853-22-6772）に連絡する。



図1. 葉表の病斑
(左：すすかび病、右：葉かび病)



図2. 葉裏の菌叢
(左：すすかび病、右：葉かび病)



図3. すすかび病菌（分生子）



図4. 葉かび病菌（分生子）

表. 県内のトマト栽培施設における葉かび病、すすかび病発生状況

市町村	調査施設	作物	調査葉数	葉かび病発生葉率(%)	すすかび病発生葉率(%)	葉かび病*抵抗性品種
松江市	1	トマト	10	100.0	0.0	×
	2	トマト	12	8.3	91.7	○
	3	トマト	16	93.8	6.3	×
	4	トマト	6	0.0	100.0	?
出雲市		トマト	8	75.0	25.0	×
		トマト	14	92.9	7.1	○
	5	トマト	2	0.0	100.0	○
		トマト	4	75.0	25.0	×
		トマト	10	70.0	30.0	○
		トマト	11	72.7	27.3	×
雲南市	6	トマト	10	100.0	0.0	×
	7	トマト	10	0.0	0.0	×
益田市	8	トマト	7	71.4	28.6	×
	9	トマト	12	100.0	0.0	×
	10	トマト	10	0.0	0.0	×
	11	トマト	10	0.0	0.0	×
奥出雲町	12	トマト	10	0.0	100.0	○
	13	ミニトマト	8	100.0	0.0	×
飯南町	14	トマト	12	0.0	100.0	○
	15	トマト	10	100.0	0.0	×
美郷町	16	トマト	10	0.0	0.0	○
	17	トマト	2	0.0	100.0	○
邑南町	18	トマト	5	60.0	40.0	○
	19	ミニトマト	4	100.0	0.0	×
	20	トマト	11	54.5	45.5	○
吉賀町	21	ミニトマト	15	0.0	100.0	○
	22	ミニトマト	13	100.0	0.0	×
	23	ミニトマト	9	0.0	100.0	○

* : ○ : 葉かび病抵抗性品種、× : 葉かび病罹病性品種、? : 品種不明

(2) 第2号 (平成18年12月 1日)

- 1 病害虫名 : イチジクヒトリモドキ
- 2 発生作物 : イチジク
- 3 発生確認場所 : 出雲市イチジク栽培圃場
- 4 発生確認の経緯

- 1) 平成18年9月20日に出雲市の家庭菜園のイチジクにおいて新葉を食害している鱗翅目幼虫を捕獲した。飼育し羽化させた成虫を愛媛県立果樹試験場に同定を依頼した結果、イチジクヒトリモドキとの連絡があった。
- 2) 本種はヒトリモドキガ科に属する南方系の蛾であり、沖縄県では土着とされている。国内では1980年代に鹿児島市、熊本市、福岡市、大分市など九州地域で採集された記録がある。近県では本県の他に瀬戸内を中心に7県(平成18年10月11日現在)で発生が報告されている。

5 形態及び生態

- 1) 卵は淡黄色で直径約0.8mmのまんじゅう型をしている。若～中齢幼虫は、胴部背面が全体に白っぽく、頭部は黒色、体側面は橙色である。終齢幼虫は、体長約40mm。頭部はつやのある黒色、胴部背面は灰色がかった黒色で、腹面は橙黄色を呈する。刺毛基部は橙黄色で、刺毛基部からは長く長い刺毛が1本ずつ生ずる(図1)。成虫は、前翅は褐色の地色に橙黄色、黒色、白色の斑紋、後翅は黄色の地色に黒色の斑紋を有する蛾である(図2)。
- 2) 幼虫の寄主植物としては、クワ科イチジク属のイチジク、イヌビワ、オオイタビが報告されている。

卵は、若い葉の裏面に卵塊として産卵される。若齢～中齢幼虫(体長約20mmまで)は集合性が強く主に葉裏に群生し食害するが、発育が進むにつれて分散し葉表にも生息するようになる。若齢では葉裏から表皮を残して食害するため、葉脈間に白い膜が残る。中齢～終齢になると太い葉脈を残し葉のほとんどを食いつくす。また、葉が少なくなると果皮も食害する。幼虫は老熟すると樹を降り、土中の浅いところで土繭を作って蛹化する。本種は蛹で越冬し、年間4世代を経過すると推定されている。蛹から

羽化した成虫は、昼間は葉裏に生息し、夜間活動する。

6 防除対策

- 1) 耕種的な防除として、イチジクでは若齢幼虫が葉裏に群生する時期に寄生葉を取り除いて処分する。
- 2) 薬剤による防除としてアディオン乳剤3、000倍（収穫前日／2回）を発生時期に散布する。



イチジクヒトリモドキ成虫

イチジクヒトリモドキ幼虫（上：中齢、下：終齢）

2) 注意報

(1) 第1号（平成18年 8月 4日）

斑点米カメムシ類の発生が多く、ハナエチゼンや出穂したコシヒカリではカメムシ類が高密度に生息する圃場がみられます。今後、斑点米が多発生の恐れがあるので注意報を発表します。

記

1. 病害虫名 斑点米の原因となるカメムシ類
2. 発生地域 県下全域
3. 発生時期 8月～
4. 発生量 多い
5. 注意報発表の根拠
 - 1) 7月26～31日に出穂している圃場ですくい取り調査を行ったところ、発生圃場率は75.0%（平成：67.6%）、平均頭数は10.5頭（平成：5.8頭）でともに平年に比べて多い。特にホソハリカメムシ、アカスジカスミカメの生息密度が平年に比べて高く、すでに幼虫が発生している圃場が散見される。
 - 2) 予察灯でのアカスジカスミカメの誘引数は256頭（7月下旬累積、平成50.9頭、前年97頭）で平年に比べて多い。
 - 3) 1ヶ月予報（7月28日広島地方気象台発表）によると、気温は平年並みか高く、晴れる日が多い見込みであり、カメムシ類の増殖に好適な条件が予想される。
6. 防除対策および防除上の注意事項
 - 1) 出穂前後の除草はカメムシを水田内へ追い込むことになるので、除草作業後に粉剤、液剤での防除を行うか、無人ヘリなどの防除計画に合わせて行うようにする。また、水田内のヒエ穂などはカメムシ類の増殖源となるので早急に処分する。
 - 2) 粉剤、液剤による防除は、第1回目は穂揃期の3日後、第2回目はその10日後に散布する。その後、圃場に成虫や幼虫の発生が認められる場合には追加防除を行う。畦畔などにイネ科雑草がある場合は、畦畔を含めて散布する。広域的な一斉防除を行うとより効果的である。
 - 3) 粒剤による防除は出穂7～10日後に湛水状態でを行い、その後成虫や幼虫の発生に応じて追加防除を行う。
 - 4) 薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

7. 薬剤による防除

1) 種類、使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)

薬剤名	使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)	系統名
スミチオン乳剤	収穫21日前まで 3回以内 1000倍	有機リン系
スミチオン粉剤3DL	収穫14日前まで 3回以内 (ただし出穂前は1回) 3~4kg/10a	
バイジット乳剤	収穫30日前まで 1回以内 1000倍	
バイジット粉剤2DL	収穫21日前まで 2回以内 3~4kg/10a	合成ピレスロイド系
トレボンEW	収穫21日前まで 3回以内 1000倍	
トレボン水和剤	収穫21日前まで 3回以内 2000倍	
トレボン乳剤	収穫21日前まで 3回以内 2000倍	
トレボン粉剤DL	収穫7日前まで 3回以内 3~4kg/10a	
MR. ジョーカーEW	収穫14日前まで 2回以内 2000倍	
MR. ジョーカー粉剤DL	収穫7日前まで 2回以内 3~4kg/10a	ネオニコチノイド系
ベストガード粉剤DL	収穫14日前まで 4回以内 4kg/10a	
ベストガード粒剤	収穫14日前まで 4回以内 4kg/10a	
アドマイヤー粉剤DL	収穫21日前まで 2回以内 4kg/10a	
スタークル粉剤DL	収穫7日前まで 3回以内 3kg/10a	
アルバリン粉剤DL		
スタークル粒剤	収穫7日前まで 3回以内 3kg/10a	
アルバリン粒剤		
ダントツ水溶剤	収穫14日前まで 3回以内 4000倍	
ダントツ粉剤DL	収穫14日前まで 3回以内 3~4kg/10a	
ダントツ粒剤	収穫14日前まで 3回以内 3~4kg/10a	その他
チェス水和剤	収穫14日前まで 2回以内 2000倍	
キラップフロアブル	収穫14日前まで 2回以内 1000~2000倍	
キラップ粉剤DL	収穫14日前まで 2回以内 3~4kg/10a	

2) 散布時期および回数

粉剤と液剤は穂揃期3日後とその10日後の2回、粒剤は出穂7~10日後に散布する。その後は発生に応じて散布する。

3) 散布量

10a当り液剤150%、粉剤、粒剤は所定量を散布する。

8. 付表

第1表 出穂した水稻におけるカメムシ類の発生状況(7月下旬)

年次	発生圃場率(%)	合計(頭)	ホソハリカメムシ	トゲシラホシカメムシ	シラホシカメムシ	クモヘリカメムシ	アカスジカスミカメ
2006	75.0	10.5	1.7	0.6	0.0	1.8	6.4
平均	67.6	5.8	2.0	0.7	0.2	0.6	2.4
2005	73.0	5.8	1.0	0.3	0.0	1.4	3.1
2004	78.6	5.1	0.3	0.5	0.0	0.0	4.5
2003	78.0	5.0	1.6	0.7	0.4	0.1	2.1
2002	46.0	7.4	4.2	0.2	0.4	0.9	1.7
2001	85.3	10.9	4.1	1.1	0.1	0.9	4.7
2000	80.5	9.9	2.7	2.0	0.2	1.2	3.8
1999	82.6	6.8	2.1	1.5	0.6	1.6	1.0
1998	52.0	3.1	1.2	0.4	0.0	0.0	1.5
1997	56.3	3.3	1.8	0.2	0.0	0.0	1.3
1996	41.7	1.0	0.5	0.2	0.0	0.3	0.0
1995	55.6	2.9	2.2	0.2	0.2	0.2	0.1

3) 臨時情報

(1) 第1号(平成18年 8月 4日)

トビイロウンカが、7月18日を中心に数波にわたって飛来し、現在、成虫の生息密度が、近年になく高まっています。今後、本虫による被害が発生する恐れがあるので、臨時情報を発表します。現地では発生状況の把握に努め、適切な防除対策を講じてください。

記

1. 病害虫名 トビイロウンカ
2. 発生地域 県下全域
3. 発生時期 主として8月上旬～（第1世代若～中齢幼虫）
4. 発生量 多い
5. 発表の根拠

- 1) 予察灯（出雲市）でのトビイロウンカの誘引数は42頭（4～7月累積、平年12.6頭）で平年に比べて多い。
- 2) 7月26～31日の払い落とし調査では、成虫が主体であり、虫数0.6頭/50株（※平年1.8頭）、発生圃場率24.1%（平年10.1%）である。この時期としては、生息密度が高く、過去10年間で平成10年に次いで多い発生量となっている。

※平年値は平成10年の多飛来の影響が大きく、同年を除外すると0.1頭/50株となる。

H18 平均 H17 H16 H15 H14 H13 H12 H11 H10 H9 H8 H7
 0.6 1.8 0 0 0.3 0 0 0 0.04 17.6 0.2 0.1 0.3頭/50株

- 3) 1ヶ月予報（7月28日広島地方気象台発表）によると、気温は平年並みか高く、晴れる日が多い見込みであり、トビイロウンカの増殖に好適な条件が予想される。
6. 防除対策及び防除上の注意事項
 - 1) 散布にあたってはトビイロウンカの生息部位である株元に、薬剤が十分到達する散布器具、方法を用いる。
 - 2) 散布後は防除効果の確認を必ず行い、その後も発生状況の推移に注意する。本虫は同一圃場内でも生息密度の差がかなりみられるので、発生状況の確認は数か所で行う。
 - 3) 薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。
7. 薬剤による防除
 - 1) 種類、使用時期、使用回数及び使用量・濃度（本田期）

薬 剤 名	使用時期、使用回数及び使用量・濃度（本田期）	系統名
スミチオン粉剤3DL	収穫14日前まで 3回以内 (ただし出穂前は1回) 3～4kg/10a	有機リン系
アブロード水和剤	収穫 7日前まで 4回以内 1000～2000倍	IGR系
アブロード粉剤DL	収穫 7日前まで 4回以内 3～4kg	
アドマイヤー水和剤	収穫30日前まで 2回以内 2000倍	ネオニコチノイド系
アドマイヤー粉剤DL	収穫21日前まで 2回以内 3～4kg	
スタークル粉剤DL	収穫 7日前まで 3回以内 3kg	
スタークル粒剤	収穫 7日前まで 3回以内 3kg	
アルバリン粉剤DL		
アルバリン粒剤		
ダントツ粉剤DL	収穫14日前まで 3回以内 3～4kg	合成ピレスロイド系
ダントツ粒剤	収穫14日前まで 3回以内 3kg	
Mr. ジョーカーEW	収穫14日前まで 2回以内 2000倍	
Mr. ジョーカー粉剤DL	収穫 7日前まで 2回以内 3～4kg	
トレボン乳剤	収穫21日前まで 3回以内 1000～2000倍	
トレボン粉剤DL	収穫 7日前まで 3回以内 3～4kg	
トレボン粒剤	前まで 3回以内 2～3kg	

- 2) 散布量
10a当り液剤150%、粉剤、粒剤は所定量を散布する。
- 3) 散布時期
8月上旬の成虫及び若齢幼虫ふ化期に散布する。第2世代若中齢幼虫期の防除は、第1世代老齢幼虫～成虫期（8月中～下旬）に成幼虫が1株当たり1頭程度以上であれば必要である。

(2) 第2号（平成18年 8月16日）

8月に入り果樹を加害するカメムシ類の発生が増加しています。今後ナシ、カキで被害の恐れがありますので臨時情報を発表します。現在のところクサギカメムシは7月6半旬から8月2半旬にかけて440頭（平年150.5頭）と平年に比べて多く誘殺されています。また、本年はヒノキ毬果の着果量も平年並みであるため、チャバネアオカメムシの毬果からの離脱も多くなり、果樹園への飛来が増加すると考えられます。現地ではカメムシ類の発生状況の把握につとめ、適切な防除対策を講じてください。

記

1. 病害虫名 果樹を加害するカメムシ類
2. 発生地域 カキおよびナシ栽培地帯
3. 発生時期 8月中旬～
4. 発生量 やや多い

5. 発表の根拠

- 1) 7月6半旬から8月2半旬にかけてクサギカメムシが440頭（平成15年150.5頭）と平成に比べ多く誘殺されている。
 - 2) 被害が多かった2002年、2004年と同様に6月のチャバネアオカメムシのフェロモントラップでの誘殺数が337頭（2002年178頭、2004年1,055頭）と多く、越冬量が多かったと考えられる。
 - 3) 巡回調査における被害果調査では被害果率は7月6半旬から8月2半旬にかけて0.4%（平成14年1.4%）から1.2%（平成14年1.4%）と増加傾向にある。
 - 4) 本年のヒノキ毬果の発生は果粉の飛散量から推測すると平成並みと予測されるため、今後チャバネアオカメムシのヒノキ毬果からの離脱が盛んとなり、圃場への飛来が増加すると予測される。
 - 5) 向こう1か月気象予報（8月11日・広島地方気象台発表）によると、気温は平成並か高く、降水量は平成並と予想され、今後も発生に好適な条件が継続すると考えられる。
- ### 6. 防除対策
- 1) 園内のカメムシ類の発生動向に注意し、発生を認めた園では速やかに薬剤散布を行う。
 - 2) 薬剤については、ネオニコチノイド系剤や合成ピレスロイド剤を中心とし、ローテーション散布を行う。農薬安全使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。